インドラ ニ とチャンダラ シンガポ ル出身の元ヒンズ 教徒（中）

:

明:
夫がイスラ ムに わるにつれ、インドラ ニ はイスラ ムを拒 しますが、クルア ンを むことをきっかけに奇妙な を 始めます。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 男性

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: ムニ ラ アル＝イドロス（インタビュア ）

日26 May 2014

集日 26 May 2014

チャンダラは神々に して祈りを捧げることができなくなっていました。彼の心は唯一なる神のみに崇 をし、他の神々へは表向きな崇 だけに留まっていました。しかしながら、彼には唯一なる神とは何者なのかということが分かりませんでした。当 もチャンダラは 折、トランス状 に入ることがありました。

チャンダラには、ヒンズ 教の崇 に 味を持ったマレ シア人の友 がいました。彼らはチャンダラに し、 しくイスラ ムのことは らず、唯一なる神だけに祈りを捧げることだけを告げていました。

同僚グル プのリ ダ だったチャンダラは、マレ シア人たちと外出していましたが、彼らがズフル礼 をしている 、彼らを待ちつつ、心のなかで神に祈り、正しい道への きを求めていました。

チャンダラは心をなだめる 果のあるアザ ンに感心しました。アザ ンは彼の心を奥底から るがしました。そしてアザ ンの には友人たち、そしてその他のムスリムたちが してやり ごすことのない礼 が きます。彼は真の神を 知することとは、非常に なことである

かのように感じました。「ただかれのみを崇 するんだ。どうして 山の偶像や仲介者が必要だと言うんだろう? 」彼が探し求めていたのはイスラ ム、そして唯一の神であることに 付くのにそう　はかかりませんでした。

婚 も、妻のインドラ ニ は寺院での活 に　的に わっていました。彼女は、自分自身よりもなヒンズ 教徒だった夫が唯一全能なる神の存在、唯一なる神への礼 、そして真の宗教には多くの神々があってはならないこと等についてたびたび言及し出したことに困惑しました。彼女の 母は、元来敬虔だった息子が今や神々を冒 していると感じていました。

婚 でさえ、チャンダラは悟りへの探求を けました。彼は心の中で祈っていた唯一神を、ヒンズ 教において探し求めました。彼は寺院での活 に 味を示さなくなり、トランス状 にも入らなくなりました。彼の母はトランス状 にあるとき、彼女の息子の心境の 化はまじないの影 だと指摘しました。

チャンダラは、イスラ ムにおいて神は唯一であること以外、イスラ ムについては何も知りませんでした。彼は 日瞑想していましたが、通常は 々な神々の名を り返し唱えていました。しかしある 、神々の名を唱えることに 和感を感じたため、英 でこう言いました。「全能なる神よ、全能なる神よ　 」瞑想中、彼はムスリムたちが真 の神に祈っているということを 信しました。

チャンダラにとって、イスラ ムの 践における最大の障害はインドラ ニ でした。彼女はムスリムたちを嫌っていた上、寺院での活 に 心でした。彼は「ペドマン」といったマレ シアのイスラ ム番 を せたりして彼女に影 を与えようとしました。インドラ ニ はイスラ ムに 味を持つことは不必要だと言い、夫に不 を述べました。彼はその 会に、彼がもはやヒンズ 教を信じていないことを彼女に告げました。ヒンズ 教には 典や信仰 条がないことがその理由でした。ヒンズ 教の起源を　できなかった彼にとっては、それが祖先によって受け がれてきた　な文化にしか えませんでした。

彼はユ スフ アリ のクルア ン翻 本を 入し、そこで 出した 言者や人 の起源、天国と地 についての 述に非常に感 を受けました。彼は全人 が知るべきことをそこに 出し、インドラ ニ にもそれを んでみるよう めました。偶像崇 者たちが地 に投げ まれることを んだ彼は、家中の偶像や肖像画を取り除きました。

チャンダラは、色々な 所からイスラ ムを学ぶことに 念しました。彼はマレ シア人の友からもさらにイスラ ムを学びました。しかし彼らは通常、彼の に答えることが出来ませんでした。彼らは彼がイスラ ム学者から教えを乞うことを示唆しました。

チャンダラはイスラ ムやキリスト教、シ ク教やヒンズ 教の本を家に持ち るようになりました。そして妻にそれらの宗教を比 してみるよう言ったのです。インドラ ニ は自分の宗教であるヒンズ 教に 足していたため、 心を示しませんでした。彼女は心の中で、彼が全能かつ唯一なる神といった概念をもって自分に影 を与えることなどはあり得ず、彼を彼女の宗教に ってこさせることを誓っていました。

インドラ ニ は、彼が持ち った本を む意 を持っていませんでした。しかしある眠れない夜に、何かが彼女にクルア ンを持たせ、それを ませたのです。その も眠れない夜は、り返しクルア ンを手にとって むようになりました。チャンダラが偶像を家中から取り除いて以来、祈りを捧げる 象をなくした彼女は心の支えを失っていました。

インドラ ニ は をみるようになりました。彼女が第一子を妊娠していたとき、彼女はカアバ神殿の をみたのです。彼女はその について、ムスリムの同僚に ねました。その同僚は自分の父 にそのことを告げました。彼は、カアバ神殿の が れたことは幸 なことであると言いました。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/112

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。